

協議会ニュース

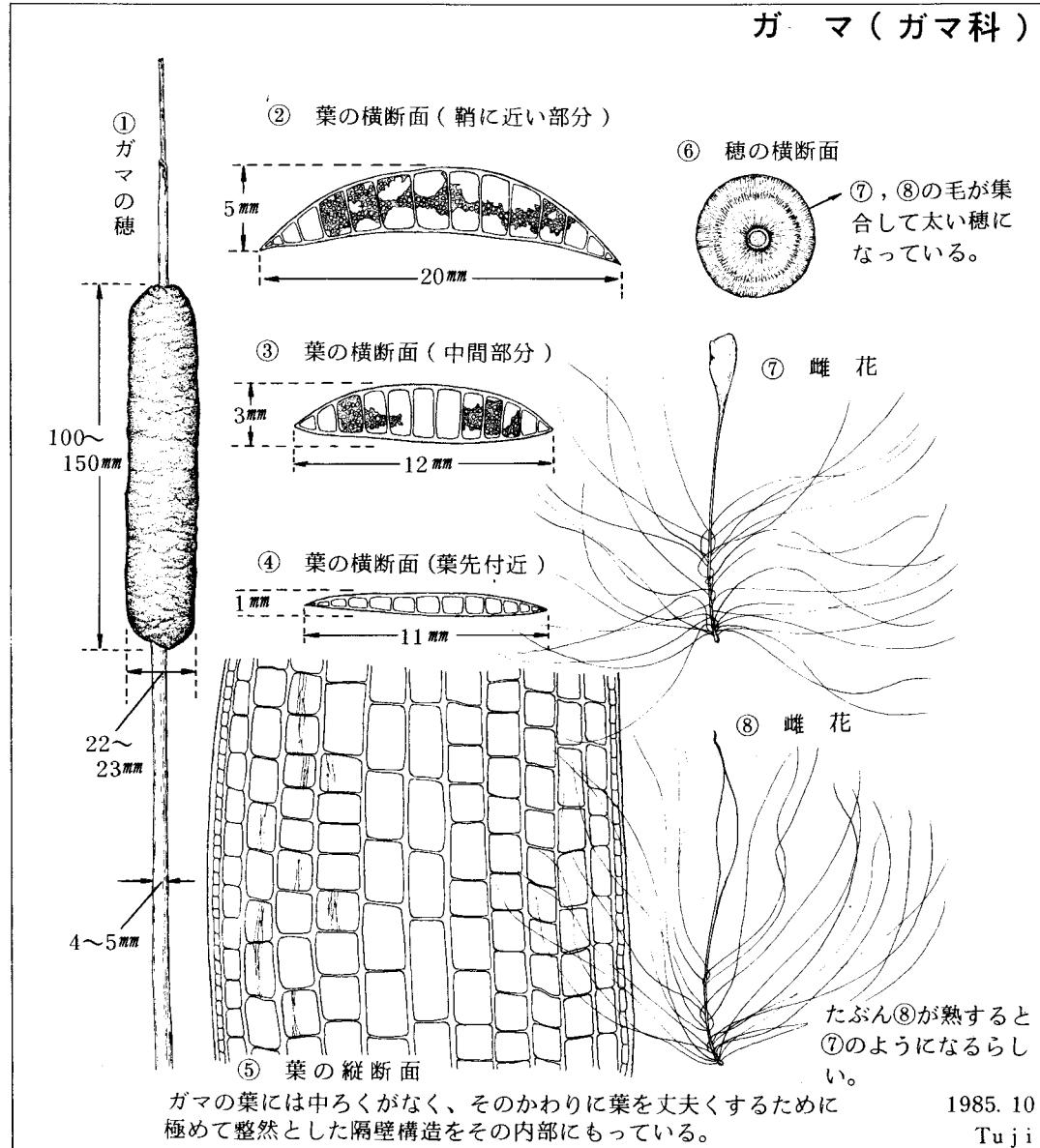
14号

愛知県自然観察指導員連絡協議会

60.12

特集・湿原

ガマ（ガマ科）



緑の国勢調査結果

編集部

第3回自然環境保全基礎調査のうち、「身近な生きもの調査」が、昭和59年4月から12月にかけて、一般公募の個人・グループ32,282人（組）で実施された事は既に御存知と思いますが、今回その調査結果の集計が環境庁自然保護局から発表されました。

今回の調査の目的が、「自然と触れ合いながら身近な動植物の様子を調べて、快適な生活環境をつくり出す手がかりを得る。」というものでしたので、こんなにも多くの参加者があったという事は、それ自体大成功で意義がありました。かつて、これだけ多くの人が自然を対象とした調査に参加した例はありませんでしたので、今回の緑の国勢調査は今までの自然保護活動の流れの中で、特筆事項といえましょう。特に、これまで生物にあまり関心のなかった人やあまり活動をしてなかった人がたくさん参加しているという事は、私達が実施している自然観察会と共に、自然保護活動の底辺を広げ、活動に拡がりを与えるものとして、極めて重要なものだと思われます。今後も是非5年毎にこの調査を実施してもらいたいものです。

しかし、今回の緑の国勢調査に問題がなかったという訳ではありません。まず第一に、調査対象とされた動植物70種類の選定に大きな問題があ

ります。ヤシガニやオオコウモリ・テッポウユリといった分布の極めて狭い種類が含まれている事や植物における帰化植物の異常な多さ（17/30=57%）と共に、何の為にこれらの動植物が選定されたのかという根拠が全く不明確なのです。「これとこれを調査すれば、こういう事がわかるはずだ。」という方向付けをしっかりしてほしいと思います。次に調査結果の精度に問題があります。根本的には未調査区域のある事が難点ですが、調査区域内の結果にも多くの疑問があります。ミミナグサ類の2種やヒメジョオン類3種の区別、よく似ているカワムツとオイカワの区別等分類にある程度の知識を要するための混乱もあるようですが、カタクリやザリガニといった同定の容易な種類においても、明らかに分布のおかしいものがかなり含まれている事は否定できません。この精度を高める事が、今後の「身近な生きもの調査」の最大の課題といえましょう。県段階で不審箇所をチェックする等の方法が必要だと思われます。

しかし、こういった種々の課題はあっても、今回の生きもの地図を眺めるのは大変楽しいものです。細かいプロットは気にせず、全体像を眺めてみましょう。ニリンソウの分布図は、そのまま夏緑樹林の位置をあらわしているような感じがします。東日本では低地にも広く分布し、西日本では山地帯を主として分布している様子がよくわかります。オナガは、分布が関東地方に著しく偏っている点は納得できても、西日本においては本当にこんな所にいるのかなという疑問を与えてくれます。タガメの分布図は、前回の緑の国勢調査に比べて明らかに拡がっています。調査人数の増加とタイコウチ等の誤認を考えても、タガメの復活傾向が感じられます。20年後、50年後の調査結果と照合ができるよう、みんなで応援していきたいと思います。

(北岡明彦)

調査地域メッシュ図



特集・郷土の自然

湿原

(編集委員) 井上久義・越湖信孝

古くは、湿原のことを田代(たしろ)といいました。作手村の「つ」と「くて」はどちらも水のひたっている場所をさす言葉であり、かつてこの地域にはこのような湿地が多くあったと思われます。森の中のぬかるみは湿地であり、空間の広がる三次元世界が湿原です。陽光が照りつけて、水がにじみ、貧栄養にして樹木の育成を拒み「陽のあたる湿地」というユニークな環境が湿原です。

湿原に対比する環境はどのようなところだろうと考えてみると、砂漠という言葉が浮かびます。降雨量が少なく、地下水位が低く、太陽の恵みは生物の生育にとっても逆の方向に働きます。雨期が来ても、それまでの環境が、保水能力も、浸透能力も育てられなかった為に、洪水という形で大地を流し、その土地の貧栄養化を助長します。低温湿潤という湿原と高温乾燥という砂漠は逆の世界のようです。しかし、生物にとっては両方とも生活し易い場所とはいえません。

湿原の種類

自然観察会で、私共は、しばしば、落葉めくりという作業をします。落葉や、落枝が、堆積されて、それが、小動物や昆虫や微生物によって分解され、再び、植物の栄養になっていくことを観察します。湿原では、過湿のために、分解者たちの生育がむずかしく、併せて低温であるということが、湿原の貧栄養化を助長します。

最初に池があって、そこに周囲の山から土砂が流入して低層湿原ができます。そこに、ミズゴケ類が侵入して中間湿原ができます。地質としては貧栄養ですので、そこからの養分が期待できないので、モウセンゴケのような食虫植物が生育します。ミズゴケのある種類は、面白い性質をもっていて、根が機能を失っても、葉先が生長点をも

っていて、こうして、幾世代も重ねたものが、泥炭層を形成し、高層湿原になっていきます。

湿原が成立する形態としては、これが基本的なものですが、もうひとつ、別の方向からのものがあります。

チャートなどの岩石やねん土層など、地中に不透水層がある場所で、従って地下水位が高く、傾斜がゆるやかで、底が広い谷になっているような環境にみられる谷湿原と呼ばれるものがあります。土壌は植物の遺体が判明できない程に分解した黒い泥の場合が多いといわれますが、それは、谷湿原の下部のことでの、普通は、砂礫質が多く、石ころゴロゴロという状態が多いようです。

愛知県の湿原分布

愛知県の湿原のうち、作手長の山湿原は泥炭層をもった中間湿原ですが、その他は全て谷湿原と考えてよいでしょう。そして、小さな湿原、湿地の多いことが愛知県の自然の特徴でもあります。しかし、今ではかなりの湿地が開墾や開発によって消えてしまい、主なものとしては、地図に示す

湿原の分布



位しか残っていません。また、湿原はシラタマホシクサのような特徴ある分布を示す植物や遺存的な種の残っている貴重な自然です。愛知県の自然のなりたちを探るための鍵をもった自然なのです。

葦毛湿原には、250種の湿地植物が自生しているといわれ、全体的には750種ともいわれます。3月下旬のショウジョウバカマに初まって、10月下旬のウメバチソウまで、そのあいだには5月上旬のミカワバイケイソウ、9月上旬のシラタマホシクサと、素晴らしいものがあります。

日本の高層湿原である尾瀬の植生は、どのように展開しているでしょうか。6月上旬の解雪期に開花するミズバショウに初まって、ショウジョウバカマの開花は6月中旬です。コバイケイソウは7月上旬、トキソウ、ナガバノモウセンゴケ、ニッコウキスゲと8月に盛花期を迎えて、9月にはもう初霜がきたり、下旬になれば初雪がきたりします。

葦毛のショウジョウバカマと、尾瀬のショウジョウバカマは違うのではないかと考えています。人に100人100様の性質、性格があるように植物だってと思ったりします。葦毛湿原を、東海の尾瀬などといわないでください。個の存在を尊重する自然保護運動が、自然保護教育が、植物の多様性、特殊性という共通項だけでもって、葦毛湿原と尾瀬を同じものとしてしまってよいでしょうか。

湿原の保護

「ゴミはゴミかごに」から「ゴミを持ち帰ろう」といって、ゴミかごを徹去することは一步前進でしょう。しかし、ここは貴重な自然だからゴミを捨ててはいけないとするならば、一寸つと問題です。と申しますのは、ある時、尾張の本宮山に行った時に、大きな荷物をかついで、笑いながら下ってくる、中年の婦人と初老の男の人の4、5人連れにすれちがったことがありました。楽しくあいさつを交して、別れたのですが、後から考えてみると、あの大きな荷物はゴミだったようです。（もしこれを読んで、思い当る人は是非連絡してください。）

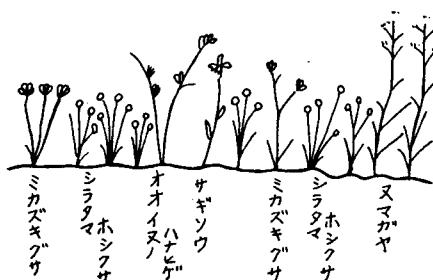
昔、内山正二郎氏が、川崎隆生氏への書簡の中で書いているように、尾瀬ヶ原のような又と得ら

れない聖地は是非共後代の人達に残さなくてはならぬと思っています。しかし私は尾瀬ヶ原の如きところが、或る一部の有閑階級や好事家の対象としてではなく、真に一般大衆が親しくいけるような世の中、社会が出来なければならぬということを前提として考えています。本宮山で出会った人達には、自分達の山だ、みんなの山だという意識があって、自然な気持でその行動をしていたのでしょうか。それでなければあの笑顔は生まれません。

尾瀬などを保護する人の中には、残さなくてはならない聖地という自覚はあるのですが、それが自分達のものだ、みんなのものだ、という事は、なかなか信じられないところがあると思います。けれども、自然保護の活動というのは、それを信じることが出来る社会を、世論を育てることに大きな意義をかけているのです。

しかし、当面の問題として湿原の保護を考えた場合、私たちはジレンマに陥ってしまいます。湿原の美しさを多くの人に知ってもらい、湿原を通じて自然の良さ、微妙なしきみを理解して欲しいと思う反面、弱い自然である湿原は多くの人が立ち入ることで容易に変化してしまいます。さらに、一部の不心得な者がミズゴケや植物を採っていくのも跡を絶ちません。従って、残念ながら湿原を多くの人に見せるためには葦毛湿原のように、きちんとした施設とパトロールが前提となります。たとえ天然記念物などに指定する場合でも、同様の措置が必要でしょう。

かつては、小さな湿原は自然の営みの中で消されたり、またどこかに形成されたりしたのでしょうか、人為の影響の強い今日ではそうしたことはないでしょうから、今ある湿原を大切に守らねば



葦毛湿原

なりません。自然観察会などでは、参加者に湿原の特徴やこうした問題点も理解してもらいたいものだと思います。

ある湿原にて

犬山八曾にある今井湿原は、典型的な谷湿原です。イヌノハナヒゲ（シロ？）が優先し、モウセンゴケ、ミミカキグサ、サギソウがみられ、ハッショウトンボがいます。湿原は、東海自然歩道とは離れていますが、地元の今井小学校みどりの少年団によって設けられた、入口の標示板は「森は自然のダム」です。入口のあたりは、小さな清流になっていますが、そこから、ぬかるみの森の中をぬけると、明るい湿原であります。ゆるやかな斜面に展開する石礫の表面は白く乾いています。広さは0.5ha程度かと推察します。周囲を森にかこまれて、別世界のそこは、全く、森は自然のダムということを実感させてくれます。周辺部には、ミズゴケや、ヒカゲノカズラがあります。そのところに、今井小学校の生徒さんたちによりサギ草が植えられたと記されています。ところが、そこにはサギソウは育ちませんでした。むかし乍らのサギソウは、イヌツゲが侵入して、やや乾いたところに、何羽か、その翼をひろげていました。

サギソウを増やそうという生徒達の夢に負けて自由に植えさせて、その結果を教えた指導者たちの微笑を想って、微笑させられました。

湿原の存在は、サギソウがあるからだけではあ

りません。多くの植物や昆虫や生物達がその中で生存している、そのトータルの場が湿原です。更に、その水源地である森や、気候、地形の自然の姿が湿原なのです。ひとつの植物が育つ場というのは、トータルとしての自然条件によるもので、そのひとつが失なわれても、その植物の生存はおびやかされます。そして、愛知県には今日もまだ沢山あると思われる、このような、あまり人に知られていない、その土地の人には愛されている湿原が、道路を造成したり、水源である樹林の樹木を伐ることにより、どんどんなくなっていくを見聞きします。

「森は自然のダム」といいますが、実際には人工のダムのほうが、保水、給水、という水利面だけからいえば優れているかもしれません。だから、自然保護というのは、こうした現象的なことではなく、もっと人間的な、トータルとしてのものに対する要求なのでしょう。それは解りますよ。それでは、その代替として、原子力発電所を作るのはどうですか。

ハッショウトンボが翔んでいます。そのなわばかりはどれだけですか。新幹線に何回のりましたか。飛行機に何回のりましたか。ヒト、個人の、大多数の人の行動範囲なんて、ハッショウトンボくらいですよ。名もない湿原の枕木に寝ころがって、流れる雲を見たら、そのようなことを想ったりしていました。

主な湿原とその植物

名 称	所 在	標 高	面 積	シ ラ タ マ ホ シ ク サ	ミ カ ズ キ グ サ	イ ヌ ノ ハ ナ ヒ ゲ	カ モ ノ ハ シ	ヌ マ ガ ヤ	モ ウ セ ん ゴ ケ	サ ギ ソ ウ	ミ ミ カ キ グ サ	コ バ ノ ト ン ボ ソ ウ	ミ ズ ト ン ボ	サ ワ ヒ ョ ド リ	ウ メ バ チ ソ ウ	ミ ズ ギ ボ ウ シ	ミ ズ ゴ ケ 類	ヨ シ
黒河原湿原	田原町	10	ha 1.0					○									○	○
葦毛湿原	豊橋市	70	3.0	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○
須美湿原	幸田町	100	1.0					○	○	○	○						○	○
小呂湿原	岡崎市	150	2.0					○	○	○							○	
矢並湿原	豊田市	130	1.5	○				○	○	○	○		○					
田之土里湿原	足助町	640	0.7							○		○	○	○	○	○	○	○
長の山湿原	作手村	540	4.1		○	○		○	○							○	○	○

支 部 情 報

10月6日 県民の森自然観察会 【奥三河】

小雨模様の天候となり、参加人員は指導員を含めて11人と少なかったが、それぞれ専門的な観察がマンツーマンのかたちで出来たことは、自然観察の一つの方向を見い出した感がします。当日は「県民の森」ビジターロッジに展示されている動植物、岩石、森林が人とどのようにかかわり合いをしているかの模型等を見て、奥三河の自然を集約して理解出来たことも、初めての方にはよかったです。（杉山）

10月27日 大池公園自然観察会 【知多】

前日からの心配された雨も上り、参加者は、一般募集51名、みどりの少年団60名の計111名で、7つの班に別れて観察会が行なわれました。カモの仲間もまだ少なく、8羽だけでしたが、園内の植物は、赤い実や青い実等きれいな実をいっぱいつけており、エノキやピラカンサ、アオギリ等の実を時々試食し、クサギやヘクソカヅラ等のにおいをかいで顔をしかめたり、昼食後に行ったシイの実の試食会は、子供も大人もとびついで食べていました。ドングリでコマや笛を作りましたが、これはとても人気があり子供たちはとても喜こんでやっていました。

しかし、ここ2～3年このドングリ工作を続けてやっているので、来年からは、新しい自然遊びを考えた方が良いのではないかとの意見が、観察会終了後の反省会で出されました。今後はこれらの研修をつんでより楽しい観察会ができるようがんばってゆきたいと思います。（水野）

11月3日 東谷山自然観察会 【名古屋】

名古屋支部「得意のフィールド」東谷山で観察会を行いました。今回雲の観察を予定していましたが、当日は残念ながら？雲一つない晴天でした。雲の観察が出きなくて困った指導員もいれば、ほっとした指導員もいるとか。当日は、新聞を見て一人で参加した中学生など老若男女38名の参加者でした。新聞を見て参加した人が比較的多く、自然観察会も一般になじんできたようです。

山道を登りながら、クモの巣をしげしげと見た

り、エンマコオロギを捜したり、ほこり草に感激したり……。午前中は観察を中心に午後からはのんびり散策しながら下りましたが、決して楽とはいえないコースを一日付合っていただいたお年寄りに感謝します。

慣れたフィールドということもあって準備が充分なされず当日の指導は指導員個人の力量に任せてしまいました。次回からは、下見をしっかり！

11月10日 豊田・猿投山自然観察会 【西三河】

当日は小雨が時おり降る天気になり、そのため参加者は少し減りましたが、指導員を含めて85名の参加者がありました。地元豊田市からの参加が多かったのですが、名古屋からの参加者もかなりありました。

今回の観察会は雨あがりということもあって、植物を中心となってしまい鳥や昆虫にはあまり目がいきませんでした。しかし参加者の中に水生昆虫に興味をもっておられる方がいて、説明をしてくださる場面もありました。

ゴガネタケを試食する機会を設けたのですが、大人は毒があるのではないかと手を出さない人が多かったなかで、子どもは喜んで食べていました。先入観をもたず、新しいことをどんどん自分の中に取り入れていく気持ちを失ないたくないのです。

観察コースが少しばかり距離が長かったので、お年寄りの方や幼稚園の子にはきつかったようです。このことから年齢に応じたコースがあつてもよいのではないかと反省が出されました。

このニュースを読んでいるあなたも一度猿投山頂上まで登ってみてはいかがでしょう。すばらしく自然と眺めがあなたを待っています。（岡田）

月例 犬山市善師野自然観察会 【尾張】

犬山市の善師野という所は自然観察会にはなかなかいい所です。主なパートを挙げますと、水田（休耕田も含む。）、社寺林（要するにシイ、カシ林）、アベマキの二次林、スキ、ヒノキの人工林、竹林、小さな人造湖等。これらが一寸歩くだけで見られるのです。しかし、今回に限らずいつも思うことなのですが、それぞれを理解し、人に伝えるという作業は、難しいことです。（富山）

会員広場

葛（くず）

木村 滋（新城市）

・クズは雑草？

クズ（当地方ではグゾウバと呼んでいる）は、秋の七草のひとつ。古来から山野に自生するマメ科のつる性植物で、昔はその茎は纖維で葛織を、つるは縄・籠を編み、根は薬用や食料とし、葉は農耕用牛馬の飼料としてきた。

このクズ、真夏盛んに繁茂し、3枚の大葉は裏に銀白色の柔毛が生え、その葉腋は蝶番状で光合成を調整できるようになっていて、夜は3葉とも表を上に下垂し、暑い晴天の日中は受光量と水分蒸発を避けるため葉裏を外向に直立させる。曇天には水平になる。歴史的にも「葛の葉子別れ」という物語りもあって風情ある植物である。

が、このクズも最近“森が危い”などとこれを雑害草扱いにされているが、これは必ずしもクズによるものでなく、害虫や大気汚染によるものと認識したい。農耕が近代化されて牛馬を必要としなくなり、恩恵のあったクズも忘れられ見向きもされなくなったのは人間の為せる業であって今更このクズを雑草視するのは酷で不憫であろう。

・セイタカアワダチソウとの戦い

10月はセイタカアワダチソウの季節。荒廃した耕地・造成地へ侵入し在来の野草を犯している。これについて「虫譜 Vol.23(1)」で桜丘高校の宗川教諭が、“クズ VS セイタカアワダチソウ”という発表をされている。それによると同教諭はこの観察・追跡調査を3年間され、クズの偉大な力を証明されている。即ち、1年目勢力伯仲。2年目クズ優勢、3年目クズ圧倒的優勢と。事実わが目で確かめたところ、その通りで少範囲であるがクズの繁茂しているところ、セイタカではなく、あってもクランク状・斜S状に僅かにみられる程度で、圧倒的にクズの偉大な力を確認した。

奥三河はまだ自然がいっぱい、この自然を保つためにもクズを見直して、奥三河からこのセイタカアワダチソウを放逐したいものである。

ブラックボックス

佐藤国彦（日進町）

家庭で使う水はどこから引いてきたか、家庭から出る汚物はどのように処理されているか、毎日食べる野菜などはどこから来たものかなど、自分の生活にかかわる物の流れは、かつては生活に必要な知識でした。

しかし、現代ではそうしたことは、一般の人々はほとんど知らないでしょう。水は蛇口から出るもので、汚物は下水にまかせて、食物はどこで作られたか知らぬがとにかくスーパーで買ってくるというように、物の流れは家庭の近くしかわからず、その前後はブラックボックスに入ってしまったのです。

飲水がどこから来るか承知していれば、その水質にもおのずと関心が向き、家庭からの汚水がどの川へ入っているか知つていれば、その汚れは気になるでしょう。しかし、知らなければそうしたことに対する無関心となります。無関心は無責任につながります。現代は情報化社会といわれますが、生活にかかわりのあることで正確な情報を得るのは意外と困難なものです。情報ですら、それがどのような意図で、どのような方法で作られたものはブラックボックスに入っているようです。

現代社会は複雑であって、ある程度の知識がなくては何事も理解できないというのでしょうか。従って、余分なことはすべてその仕事に携わっている人や専門家にまかせておけばよいのでしょうか。そして、社会のことはすべてブラックボックスに入れてしまい、我々は家庭の中で端末機だけ操作していればよいのでしょうか。

人間が動物から人間となった時、本能の代りに習慣とか文化を手に入れましたが、その文化の基本は、人間が生活者であるということです。そして、そのためには自分の生活にかかわる物の流れ、情報の把握、環境の状況にも目を向けていなければなりません。自分の生活を快適なものにするには、家庭の中だけでなく、家庭をとりまくものにも注意すべきでしょう。生活にかかわることに対して知識を持つとともに、それに関与していなければならぬと思うのです。

街路樹の鳥の巣分布

中 西 正（豊橋市）

1. はじめに

冬の街路樹を見ると鳥の巣が目につく。夏の間は葉に隠れて全くわからなかつたものが、白日のもとに晒されている。鳥類については素人であるが、都市化に伴う自然の変化に関心をもっており、身近にある公園や街路樹の鳥の巣に強い印象を受け、その数を調べてみた。

都市化とともに鳥の社会に変化が生じているという。昨年には都市に棲む鳥（都市鳥）の調査が行なわれている。今回調べた巣はヒヨドリ、キジバトのもので、いずれも都市鳥の代表種と言えるものである。

近年、ヒヨドリはその数を増し、年中見られるようになっている。キジバトは人間の近くに生活の場を移して来た。これ以上のこととは知らないが、現在を記録することが次の変化を捉えるのに少しでも資するがあろうと思い調査結果を記すことにした。

2. 調査について

調査は1985年1月13・15日に行なった。場所は豊橋市三ノ輪町・岩田町の主として街路樹である。地図に示すように道路によってA B C Dと調査区を設けた。また、岩田運動公園をE地

区とした。調査は単純で、どこの街路樹にどの鳥の巣がついているかを記録した。なお、A B地区では交差点を区切りに細分化し、Aで10地点、Bで7地点に分けて記録した。

3. 結 果

① 木の種類との関係

ヒヨドリの巣は、お椀を深くした形で、材料にビニールひもを多く使い密に作られている。上向きの枝に挟まれており、樹形の中心で上部にある。キジバトは皿形で、材は枝で粗く作られ、横に伸びた枝に置かれている。従って樹形の周辺の低い位置にある。

表1に示すようにE地区では他と比べて、巣の数は少いが、その巣はヒヨドリでナンキンハゼ・イロハモミジ・ケヤキ・ソメイヨシノであった。キジバトの巣はナンキンハゼで2個、イロハモミジで3個であった。

A B D地区の街路樹はトウカエデであるが、A Bでは多くDでは少い。これはDの木が小さいためと思われる。C地区はフウで、A Bのトウカエデと大きさは似ている。しかし、ここにはヒヨドリの巣は見られず、キジバトの巣も少なかった。フウの枝が太く、横に出ることが、

表1. 地区別の巣の数

調査地区		A		B		C		D		E	
樹種	トウカエデ (イチョウ)	トウカエデ	トウカエデ	フ	ウ	トウカエデ	トウカエデ	トウカエデ	トウカエデ	イチョウ、ユリノキ、ケヤキ、ナンキンハゼ、 イロハモミジ、シダレヤナギ、ソメイヨシノ	
調査本数	(100)		100	(79)		79	42	62	74	70	—
巣の数	ヒヨドリ	7	11	2	11	0	0	1	0	4	ナンキンハゼ、ケヤキ イロハモミジ、ソメイヨシノ
	キジバト	14	18	9	19	3	2	1	3	5	ナンキンハゼ(2) イロハモミジ(3)
道路からの位置		北	南	北	南	西	東	西	東	—	

○ A地区は一部イチョウ

○ () 内は実数でなく片側に準じたもの

巣を置くに適さないためではないだろうか。

巣をかけるに当って、鳥の種類によって樹種の好き嫌いがありそうである。その理由の一つに枝の太さ、枝の張り方があるのではなかろうか。

② 地域による違い

表2にA・B地区での細かな分布を記した。この表から鳥の巣の分布は一様でないことが分かる。道の南北の比較では、B地区でその違いが顕著で、南側に多い。ヒヨドリが北側で見られたのはB-1地点だけである。

道の片側で3個以上の巣が見られた地点は、Aの4・5・8、Bの2・3・5・6であった。この地点

の環境を見ると、集合店舗と空地で特色付けられる。店では照明が影響を与えているかもしれない。空地・畑・駐車場一は餌場に使われているのではないだろうか。

A-Bにかけての一本の道に、ヒヨドリ・キジバトあわせて91の巣が見られた。その様子は鳥のアパートという感すらある。この状況と他地域との比較をすることによって、都市鳥の好む要素が浮かび上がるのではないだろうか。また、今後の変化を見ることによっても都市鳥の生態を知る手掛りが得られると思う。以上のこととは今後の問題としたい。

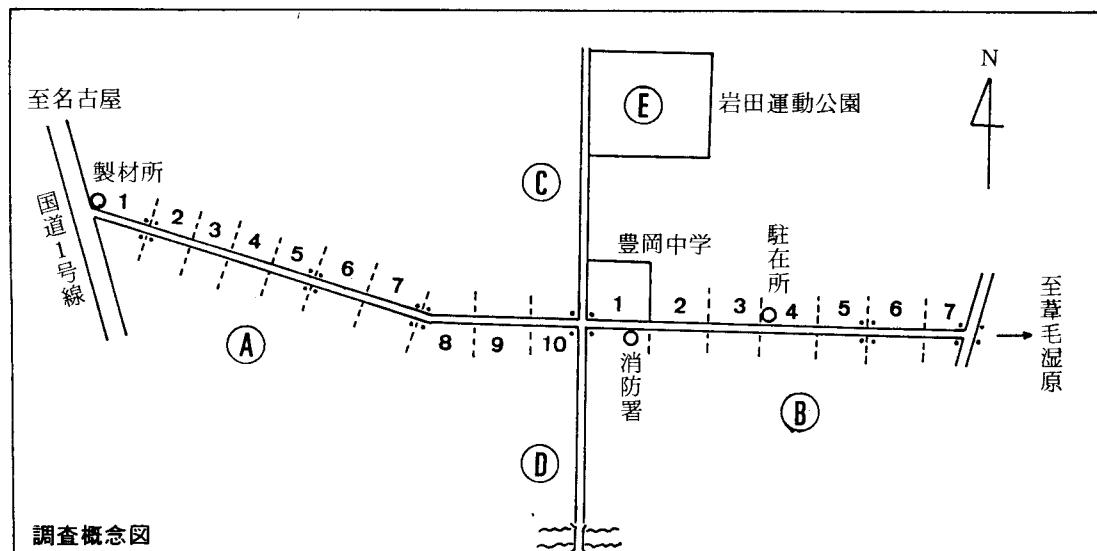


表2 巣の分布(A・B地区)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	
A	北	ヒヨドリ	1	1	0	0	3	1	0	1	0	0	7
	キジバト	1	0	1	3	3	1	2	2	1	0	14	
B	北	ヒヨドリ	0	1	2	0	3	1	2	1	0	1	11
	南	キジバト	1	2	1	2	3	0	2	5	1	1	18

		1	2	3	4	5	6	7	計	
B	北	ヒヨドリ	2	0	0	0	0	0	2	
	キジバト	1	2	2	1	2	0	1	9	
B	南	ヒヨドリ	1	3	2	1	1	2	1	11
	キジバト	2	4	4	1	3	4	1	19	

シラタマホシクサ

北岡明彦（瀬戸市）

東海要素という言葉を知っていますか。これは、いわゆる東海地方（三重県伊勢湾岸～愛知県全域・岐阜県美濃地方～静岡県西遠地方）にだけ分布する植物群につけられた名称で、愛知県の植物相を特徴づける最も重要なものです。今回の題材であるシラタマホシクサは、その分布域・美しさ及び知名度からすると東海要素の盟主ともいべき存在です。

このシラタマホシクサは、ホシクサ科に属する湿地性の一年生草木で、8～10月にかけて文字通りの「白い玉」のような花をつけます。その分布は、図-1のように三重県四日市市周辺を西限、静岡県浜松市周辺を東限とし、北限は岐阜県恵那郡というように全国的にみると極く狭い地域でのみ見られる大変貴重な植物です。まさに、東海要素といえましょう。愛知県内では、葦毛湿原に代表される低地の酸性低湿地にのみ見られ、標高の高い地方には分布しません。また、この分布は、イネ科のウンヌケという、ハゲ山の尾根や原野にはえる植物と極めて良く似ています。（図-2）片や湿地性で東海地方固有のシラタマホシクサ、もう一方は乾原性で遠くインドから中国山東半島

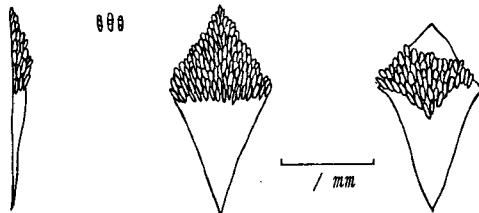


図3. シラタマホシクサの花苞

・九州をへて隔離分布するウンヌケという正反対の分布と性質を持つ2種類の植物が良く似た分布域を持っているというのは、実に不思議な気がします。

ところで、シラタマホシクサはなぜ白く見えるのか御存知ですか。不思議に思って、30倍のルーペで頭花の外側を覆っている花苞を見てみたら、図-3のような構造になっている事がわかりました。何と、花苞の背面の上半分には白色の毛が密生していました。また、この毛は3個の細胞からできており、中空でソーセージ状をしている事もわかりました。がくもまた、背面上部に同様の毛を密生していました。そのためシラタマホシクサの頭花は、いかにも「ふっくら」とした感じの「白い球」のように見えるようです。そして、さわってみた時に、クッションのような感じがするのも、このためでしょう。

こうした、植物のマクロな見方とミクロな見方の両方を私達の自然観察会でも使いこなせたら本当に楽しい説明ができるだろうと思います。

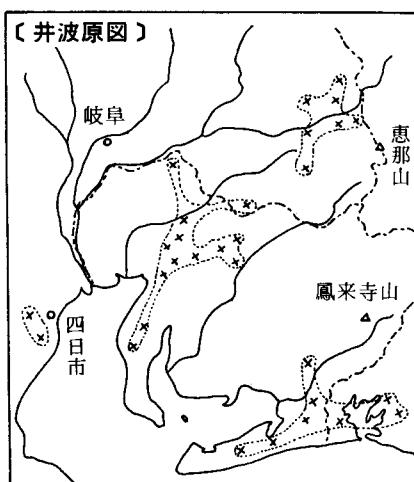


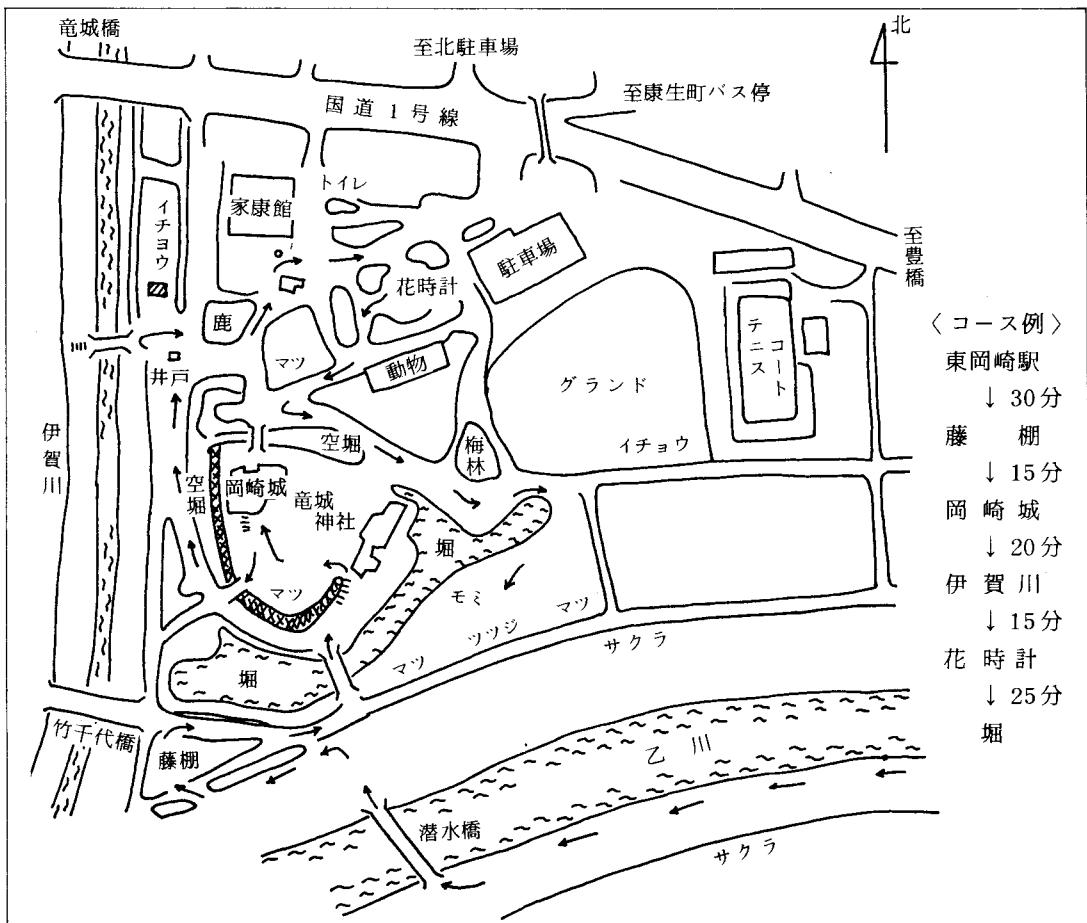
図1. シラタマホシクサの分布



図2. ウンヌケの分布

岡崎公園

西三河支部



岡崎公園は、岡崎城を中心とした約9.5kmの手入れの行き届いた都市公園です。古くから桜の名所として知られ、公園周辺の乙川、伊賀川の堤防には多くの桜が植えられています。また、岡崎市指定の天然記念物「五万石藤」は、寄せ植えではあるが一番太いものは2.42mもあり、枝は11mに達するものもあります。この他、樹高10mを越すマツ、ヒマラヤスギ、イチョウ、クスノキ等が岡崎城を囲んでいます。これらの樹木や乙川、伊賀川、内堀等の水辺を中心に野生生物の生態の

一部を観察することができます。

岡崎城天守閣は、昭和34年に再建された鉄筋コンクリート造りであるが、内には岡崎城下の歴史等が展示してあり、天守閣からの觀望（現在）と過去を比較すると興味深いです。

（入場料大人150円）

〈交通〉

名鉄東岡崎駅下車徒歩30分。バス（国鉄・名鉄）では殿橋または康生町下車して徒歩10分。

（水鳥富人）

行事案内

期日	主 催	内 容
1. 8 (水)	名古屋支部	例会「都市河川」
	市教育館	18:30
1. 10 (金)	知多〃	例会
	阿久比町公民館	18:00
1. 12 (日)	奥三河〃	総会・懇親会
	於新城市内	
1. 25 ~ 26	名古屋〃	研修会「雪上観察、星」
	於茶臼山高原	・申込: 福西
1. 25 ~ 26	西三河〃	総会・懇親会
	本宮山ロッジ閣苑渓谷	
1. 26 (日)	尾張〃	月例観察会・総会
	名鉄善師野駅	9:00
1. 26 (日)	知多〃	総会
	東海市農業センター	11:00
2. 2 (日)	東三河〃	総会
	豊城地区市民館	1:30
2. 2 (日)	名古屋〃	総会・例会「街路樹」
	場所未定	PM (支部員通知)
2. 16 (日)	名古屋〃	観察会現地調査
	鷺津トリデ	(〃)
2. 16 (日)	尾張〃	月例観察会(犬山)
	名鉄善師野駅	9:00
2. 23 (日)	協議会	総会・研修会
	(後日通知)	

会員移動

[加入]

9月に自然観察指導員講習会が実施されたため多くの方が会員として加入されました。活躍を期待しています。

阿部京子、飯田昌宜、家田健吾、石原伯和、伊藤信明、伊藤英夫、岩瀬直司、大羽康利、奥田勝夫、亀萬重範、神戸敦、熊谷尚久、後藤多恵子、斎竹善行、佐々木和治、佐藤正利、佐野滋、沢田光孝、鈴木千夜子、鈴木久、鈴木基稔、鈴木伊代子、田内たづ子、高須慶子、滝崎吉伸、竹下怜司、竹下久子、武田篤、玉井房子、戸河里光雄、長瀬好文、野末満江、白鳳公明、橋口美智子、林哲也、彦坂雅史、藤田則子、堀田昭二、村上和彦、村松武、森本修、山内美穂子、横山良哲

[脱退]

今西敦子 [知多支部] 福岡県へ転出
都築尚子 [名古屋支部] 滋賀県へ転出
※12月15日現在の会員数は、251名です。

[編集後記]

今号の「観察と研究」欄で中西正氏が調査された街路樹の鳥の巣の分布は、我々の日常生活と身近で密着したテーマであります。

こうした調査とは反対に大規模調査方法として広大な地域の植生の変化を人工衛星を使って調査する方法もあります。が、身近な小地域の動植物の変化、分布などを一人のナチュラリストの目と足を使って調査することは、ナチュラリストの使命として大変重要なことであり、又果す役割でもあります。何が、いつ、何処でどう変化したのか、知る為にも調査、記録することは何よりも必要ではないだろうか?

◆お知らせ

編集委員募集!!

[機関誌]協議会ニュースの編集に興味のある方/是非連絡下さい。
連絡先は各支部長、又は渡並まで。

TEL 774-4680

— 渡並 —

目 次

- [解説] 緑の国勢調査結果 1
 - [郷土の自然] 濡原 2
 - 支部情報 5
 - 会員広場 6
 - [観察と研究] 街路樹の鳥の巣分布 7
 - [生物のくらしと分布-3] シラタマホシクサ 9
 - [フィールド・ガイド] 岡崎公園 10
 - 行事案内、会員移動 11
- 表紙絵: 辻伸夫(安城市)

編集事務局: 名古屋市名東区猪高町猪子石広田9

7-511 (渡並)